

國學院大學學術情報リポジトリ

令和元年度大学院特定課題研究の研究成果報告書：
現代ポップカルチャーにおける異界：
日本人の深層意識を探る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 利博, 石井, 研士, 飯倉, 義之, 伊藤, 慎吾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001519

令和元年度 大学院特定課題研究の研究成果報告書

研究課題：現代ポップカルチャーにおける異界—日本人の深層意識を探る

研究代表者：山田 利博

共同研究者：石井 研士、飯倉 義之、伊藤 慎吾

研究成果

1. 本報告書の概要

本研究遂行中に「令和」という新時代を迎え、世はますます革新の方向に向かっているかのように思われるが、実際はそうでもない。そもそも「令和」の出典が『万葉集』というのも、その表れの一つとも言えようが、我々の身の回りには、このように「自覚」されていない古代性も多数残存する。それを、國學院ならではの各々の専門性を活かし、多角的な視点から明らかにしてみようという試みが本研究の「狙い」である。具体的には「研究課題」に示したように、「現代ポップカルチャーにおける異界」に注目した。

「異界」の定義は、國學院のメンバーには今さら不要かも知れないが、研究の出発点として一応示しておく、「人間が周囲の世界を分類する際、自分（たち）が属する（と認識する）世界の外側の世界。（中略）民俗社会で、靈魂が行く世界、つまり他界（来世）だけでなく、自分たちの社会の外側に広がる世界である。他界が時・空間両方の認識であるのに対し、異界はより空間的なイメージで把握される。たとえば妖怪は、死後の存在である幽霊と区別されるが、彼らが住む世界は異界である」（『日本民俗大辞典』（吉川弘文館 1999年）上巻68頁による）。「靈魂」、「妖怪」などという概念は、今ではすっかり廃れしまったような錯覚があるかも知れないが、実はそうではない。後に触れる石井教授の、本年度における研究成果の一つである、令和元年12月14日に常磐松ホールで行われた講演資料に示されているとおり、少なくともラノベの世界では、「タイトルに『異世界』『転生』を含む作品は2013年までは年間10点ほどだったが、14年に128点に急増し18年は過去最高の567点になった」（2019年7月2日の朝日新聞。マンガ・アニメでははっきりした統計データ無し）。これは如何なる要因によるものであるか、先にも触れた、本学の得意分野である宗教学・文学・民俗学の視点から明らかにしようというものである。

しかしながらこのテーマはかなり大きいものであるので三年計画とし、今年度はその一年目であるから、まとまった研究成果というものは未だ出ていない。そこで本報告書では、各々の研究の途中経過の報告となることを諒とせられたい。

2. 成果報告

①宗教学分野（石井教授担当）

これまでの研究に引き続き、アニメにおける「魔法少女もの」の分析を担当した。その成果は先ほども紹介した令和元年12月14日に行われた講演と、昨年度の大学院紀要に示されているが、後者は実際の神社をモデルとした「巫女」の登場する作品についての分析で、「異界」とは直接には関わらないため、ここでは前者を中心にまとめておく。

教授によれば「魔法少女もの」は、昭和41年に放映された『魔法使いサリー』に端を発し、少しずつ形を変えながらも、現在のプリキュアシリーズ（外見上「魔法少女」に見えないので注しておけば、ギネスブックでもそのように登録されている。項目はその当時55人で、「アニメ映画に登場する最も多いマジカル戦士の数」。今はさらに増加して63人）に至るまで、ほぼ途切れることなく連綿と続いている。しかしながらその形態は、プリキュアシリーズが良く示しているように、とんがり帽子にほうきに乘ってという、本来の魔女スタイルではなく、普通の格好をした女の子が「超常」の力を使うのであり、そこに「宗教」に通ずるものがある。すなわちこれは、日本人ならではの宗教意識の反映と見ることができるというものである。

教授のこの研究は今後さらに深められる予定であり、その一端は、令和2年度に著書として発表されるとのことである。したがって次年度の報告書はそれを添付したものとなるであろう。

②民俗学分野（飯倉准教授担当）

研究計画通り慎重に対象作品を選定され、年度末に西尾維新の「化物語」シリーズに、ほぼ対象を絞られた。参考までに「化物語」シリーズについて若干解説しておけば、平成17年にファンタジー小説として始まった怪異もので、その後現在に至るまで21シリーズが刊行されており、さらに2シリーズが刊行予定である。また、近年はやりのメディアミックスにより、半数程度のシリーズがテレビアニメ化、そのほかにドラマCD、劇場版、ゲーム等も存在するので、本学学生も含めて、今の若者でこれを知らないものはまずいないと思われる。内容は先にも述べたように「怪異もの」で、これだけでも、それを専門とする飯倉准教授が研究対象とするにふさわしいと思われるが、特にその中の一つ『暦物語』は、噂話が実体化して「怪異」となるというストーリーなので、伝承文学の研究テーマとしてもふさわしい。次年度以降の飯倉准教授の報告が楽しみである。

③主にラノベ分野（伊藤兼任講師担当）

伊藤講師も慎重に対象を検討され、まだ完全決定というわけではないそうだが、『転成したらスライムだった件』（略称:転スラ）を中心に考えているとのことである。『転スラ』とは、平成25年に伏瀬という小説家によって始められたライトノベルで、現在までに15冊が刊行され、平成30年10月から31年3月にかけてテレビアニメ化され、第2期も本年10月より放送が予定されていた（実際はコロナによる放送延期で令和3年1月より）。またこれもメディアミックスの形態を取り、スピンオフ漫画・ゲーム等も存在する。タイトル通り主人公が異世界に転生したらスライムとなってしまったという話であり、そこから主に「捕食者」という、相手を飲み込むことによりその能力を自分のものとしてしまう能力により一国の王にまで成り上がり、その後は国王として国民を守るために様々な困難に立ち向かう。俗に「異世界転生もの」というジャンル呼称が既にあるように、この手の作品は他にも多数あるが、スライムという、ゲーム世界等では「最弱」とされるものに生まれ変わってしまうという着想は珍しい。そういう存在である故、昔話にも存在する、いわゆる「致富譚」が成立する（もっとも最近では『盾の勇者の成り上がり』という、そのものズバリの名を持つ作品も他に存在する）のだが、その専門家でもある伊藤講師が、次年度以降この作品をどう分析するか楽しみである。

④総括（山田担当）

最後に山田が総括として、この研究をまとめる予定だが、本年度はまずその基礎固めとして、自身のこれまでのこの分野の研究をまとめ単著とした。それが別添の資料である。

簡単にその内容を紹介しておくと、当初の「概要」にも記したごとく、現代人はもう「異界」などというものは存在しなくなったと思っているが、そんなことはないのであり、例えばコンピュータの発達によりヴァーチャルリアリティなどというものが誕生すると、人はたちまちそれを「異界視する」（というか、本当にそれは「異界」なのかもしれない）ということ、少し古くなるが、平成11年にNHK教育テレビで放映された『コレクター・ユイ』というアニメを以て証明し、またこれは本来は古い考え方ではあるのだが、人類にとって「宇宙」はやはり「異界」であり、それゆえ一見すると「異界」など扱ってはいないように見える、平成30年の作品『宇宙戦艦ヤマト2202』や、昨年から今年にかけて放映されていた『スター☆トゥインクルプリキュア』でさえも、それとして指摘できるのだということを証明した。つまり人間はどんなに科学技術を進めても、それに伴って「新たな異界」を自分で生み出してしまうのであり、人間は異界がなくては存在できないのだというのが現在の山田の結論だが、今後はこれを、こうした「一見「異界」とは無関係」に

見える作品の分析を中心として深めていきたい。

ただし、昔はほとんど万能の魔力が使えた「魔法少女」が、最近では「ただ一つの魔法」しか使えないものが多くなっている現象に示されているように、人間と異界との距離が徐々に離れていることにも、現時点で気がついてはいるが、先ほどの指摘と併せて、これが今後も拡大する方向に進むのか、それともこれは単に「古い異界」が減びつつあるだけの話であり、人類は「新たな異界」をまた生み出すのかという点についても考えてみたい。

本報告書の最後に、これはまだ「研究」の域にまで達していないし、飯倉准教授とのすりあわせも必要なのだが、2月に山田が行った、水木しげるの故郷・鳥取県境港市の調査旅行の報告もしておく。飯倉准教授は伝承文学が専門だが、山田は「文字に書かれた文学」が専門なので、どうしても「作家」の存在が気にかかる。そこでこれまた、「同一の原作を5回に渡ってアニメ化した」としてギネスブックに登録されており、平成20年に放映された『墓場鬼太郎』をカウントするかしらないかで意見が分かれるが、通常はカウントせずに今年度3月まで第6期が放映されていた『ゲゲゲの鬼太郎』の生みの親・水木しげるがどういう環境で育ったかに興味があったからである。平成3年にNHKでドラマ化されたのでご存じの方も多かるうが、『のんのんばあとオレ』で、水木に妖怪の知識を最初に教えてくれた「のんのんばあ」と出会ったのもこの地であるし、現地に行ってみて実感したが、地元の都合もあるようだけれども、第6期では、登場人物の一人で、猫娘と並んで鬼太郎のガールフレンド的ポジションを占める人間の少女・犬山まなの田舎が境港で、祖父と祖母が住んでいる設定となっているので実にしばしば境港が登場し、かつその回は決まって境港市が提供しているからでもある。

期間は令和2年2月7日から10日にかけて。行き帰りに一日を要するので、実質中2日を調査の日とし、これは半ば偶然であったが、毎週日曜の午前中はボランティアが鬼太郎ゆかりの地を案内してくれ、それがたまたま院友の宮司さんであったため、予想以上の収穫があった。その生データをここに書き連ねるとあまりにも煩雑になるため、それはいづれまとめてからという形にし、ここでは概要にとどめる。

回った場所は、水木しげるロード・水木しげる記念館・行ってから今もあると判明した水木しげるの生家（次頁の写真中央の家。ただし、建物は建て代わっているようである。後に詳述）・水木家の菩提寺（水木しげる本人の墓は東京調布にあるため、ここには埋まってないとのことである）・水木しげるの母の生家・祖母の生家等である。これまたドラマ化されて有名な奥さんの実家は遠すぎて断念したが、奥さんは水木の創作意識とは直接には関わらないだろうと判断したこともある。のんのんばあ関連の地は、作品中でも語られ



ているように、既に残っていない。

中でも一番印象的だったのは生家である。これも水木が住んでいた家ではなく、もっと古いものと思われるが、生家の場所を教えてくれた近所の、海とくらしの史料館には、

水木の先祖の家の写真が展示されていた(次頁の写真参照。位置は現在と同じようである)。ご存じの方も多だろうが、「武良」というのが水木の本姓で、「水木」は東京で住んでいたアパート名に由来するペンネームである。道を挟んだ真向かいにあるので、アングルの両方収めることは無理だったが、もとは廻船問屋であった水木の家を象徴するように、生家は海の正面にある。案内をしてくれた観光ボランティアによると、今でもこの海は海上保安庁の巡視船の重要拠点となっているとのことである。すなわち「外界」との「接点」であるわけで、ここから水木の「異界」に関する興味が無意識のうちにも育てられたのであろうということが容易に見て取れたが、同時に『ゲゲゲの鬼太郎』に描かれる海の妖怪は意外に少ないということにも気がついた。この問題は今後機会があったらもう少し詰めてみたい。

もう一つ感銘を受けたのは、『のんのんばあとオレ』にも出てくる、水木が少年時代何度も見に行き、長い時間(あるときには2時間にも及んだとある)そこから離れなかったという、武良家の菩提寺・正福寺の六道図(次頁の写真参照)である。六道図自体はさほど珍しいものではないが、写真からも窺えるように保存状態は良好で、細部まで鮮明に見える。これだけ美しければ、少年時代から「絵だけは天才」と謳われた水木少年が心惹かれたであろうことが容易に見て取れた。

簡単ではあるが、以上が山田の今年度の研究報告である。

